

【海外情報】

ウガンダ熱帯獣医公衆衛生学研修の報告(2)

蒔田 浩平

(酪農学園大学獣医学群)

前号(第57巻第6号)では日本学生支援機構(JASSO)からの助成金(ショートステイ・ショートビジット)を得て行った酪農学園大学獣医学部学生のウガンダ共和国熱帯獣医公衆衛生学研修について4年次学生2名が記述した現地研修内容と感想を紹介しました。

引き続き、今回はウガンダ熱帯獣医公衆衛生学研修に参加した3年次学生3名の現地レポートと感想を紹介します。

獣医学類3年 古瀬 歩美

2013年2月17日(5日目)

今回 私は、国際的な研究者が働く現場とその対象について理解を深めるために参加しました。

ウガンダ共和国ジンジャ市のホテルに宿泊した私たちはナイル川に映える美しい朝焼けと羽虫に目を細めながら起床しました。

早朝からウガンダに来て初めての観光があり、クルージングをしました。ジンジャ市は白ナイル川の起始地として有名な街です。

大地の隆起と河川がヴィクトリア湖をつくり、そこから白ナイル川が流れ出ます。白ナイル川はまっすぐに北上して青ナイル川と合流し、地中海に至ります。文明をおこし、無数の生命を養ってきた「母なるナイル」は住血吸虫の世界有数の生息地でもあるということに胸震える思いでした。

クルージングでは鳥類(コウノトリ、鶉、カワセミなど)やベルベットモンキーに遭遇しました。寄生虫学・野生動物学の権威である浅川先生とご同行できたため、フィールド分野における研究者の在り方についてもお話を聞くことができ幸いでした。

午後は北のカムリ郡に移動し、ブソガ王国内のブソガ大学を訪問しました。ウガンダ国内には複数の地方民族が存在し、各民族の言葉や服装、家屋の造りも一風異なります。ブソガ大学では家畜の人工授精の講義が行われていることに驚きました(写真1)。家畜の繁殖が人々の生活に直結する重要項目でありつづけるゆえんと思わ

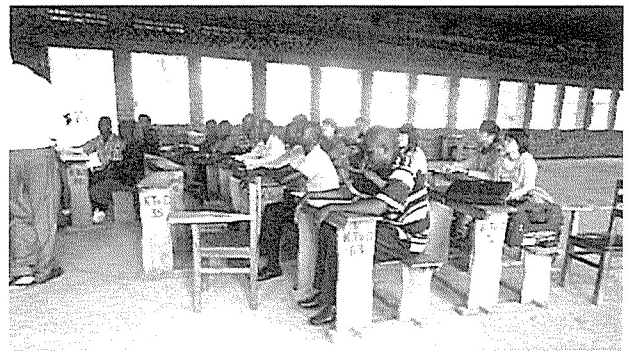


写真1 ブソガ大学で現地の学生と一緒に家畜人工授精の授業を聴講する

れます。家畜がこの地では蛋白質供給や労働力以上の「財産」を意味するということを知りました。

2月18日(6日目)

今日はカムリ市の地域NGOを訪問し、国際家畜研究所の研究者であるGydeon Nadioppeさんと現地スタッフPeterさんの案内でカムリ酪農場を見学しました。この地域NGOである「KAMURI DAIRY FARMERS ASSOCIATION」はスタッフや住民に栄養・衛生に関する啓蒙・普及や家畜・農産物の収益をあげる取り組みなど農家の支援・指導を幅広く行っています。中でも、NGOが新規農家に家畜を貸し出し、軌道にのった農家はつぎの新規農家に家畜を貸し出すという「家畜の貸し出しプロジェクト」は、地域事情を考慮しながら住民と密着した活動であると感じました。

ウガンダの家畜は牛、豚、めん羊、山羊、鶏などです。経営規模は小さく、家畜1~10数頭、畜舎は木造で、舎内飼育ないし放牧の飼養形態です。農家の方はみんな礼儀正しく親切で、動植物の名称から生産・給餌システムまで丁寧に説明してくださいました。NGOと地域農家の関係は良好で、農家は自身の家畜や農場に誇りをもっている印象を受けました。子どもたちは布のような服をまとい、裸足でも元気にかけまわっており、基本的には幸福そうに見えました(写真2)。一方で、マラリアに罹患している青年や頭皮に真菌を患う子供たちとの出会いも忘れられません。



写真2 訪問先の地域農家の方は畜産の現況を懇切丁寧に説明する

私はこれからも国際協力や公衆衛生について学び、日本人であり獣医師を志す自分が成すべきことを続けていこうと思いますが、このような守りたい笑顔や人々の優しさを見たことが自分の力になることを確信しています。最後になりますが、今回このような機会を与えていただいた日本学生支援機構様、本学ならびに受け入れ先の関係各位に心より感謝申し上げます。

獣医学科3年 酒井 亜美

2月19日（7日目）

7日目の朝、我々は早起きして牛のせり市場見学に出発しました。しかしながら、到着時刻が早すぎて人々も牛もまだ十分に集まっていませんでした。通常であれば、多くの牛が取引のために連れて来られ、その他にもアクセサリーなどが売られている光景を見ることができそうです。残念ではありましたが、ムバレ市へ向けて出発しなければならなかったため、わずかな牛ときれいな朝日を後にしました。車での移動中、市場へ向かう人々とすれ違いました。

2時間ほど車で移動した場所にムバレ市があります。到着すると、激しいスコールが出迎えてくれました。近くに標高の高い山があるからだそうです。普段は霧がかかっており、はっきりと見られることは珍しいそうです。JICAで活動されている海外青年協力隊員の光廣直貴獣医師と合流し、ムバレ市の獣医事務所へ向かいました。事務所ではトリパノソーマという牛に寄生する原虫の一種を顕微鏡で観察させていただくことができました。

JICAは、養豚場の建て替えやツェツェバエ対策などの事業だけではなく、水道の設置、農産物の普及や稲作などさまざまな分野に貢献しています。ウガンダでは、放し飼いの豚が人糞を食べることで豚囊虫症と人の条虫

症および有鉤囊虫症が問題になっていますが、この対策として養豚場においては豚舎を作り、舎飼いすることで本疾病の蔓延を防止することができます。また、水道を設置することで人獣共通感染症のリスクを減少させることが可能になります。公衆衛生に関する教育を推進することで、人々の感染症に対する関心を高めることができるのです。

農場見学では、牛や山羊の堆肥からガスを作り出す技術があることを知り、驚きました。農村地域の水道がないところでは雨水を溜めて使用するのだそうです。ガスがなければ炭火で、電気がなければろうそくを使う生活なんて日本では想像できないかもしれません。しかし、そこには普通の生活としての営みがあるのです。見学させていただいたこの農場でもたいていバナナやカカオ、マンゴーやジャックフルーツなどの植物を栽培していました。ジャックフルーツを生産者からいただき、ウガンダで初めて食べましたが大変美味でした。無農薬であるところも魅力です。

ムバレ市は、自然いっぱいの素晴らしい環境ではありますが、雇用問題や人獣共通感染症対策といった課題が山積しています。どのように地元住民に疫学的考えや公衆衛生の正しい知識を普及させるか、獣医師の雇用を増加させるために何をすべきか、改善点はまだまだあります。

こういった状況はウガンダだけではなく、アフリカをはじめとしたアジアなどの発展途上国でもみられるのです。

今後も獣医学を学ぶ学生として海外に目を向けた活動に積極的に参加していきたいです。

最後になりましたが、現地をサポートしてくださった方々、ご指導してくださった方々に感謝申し上げます。

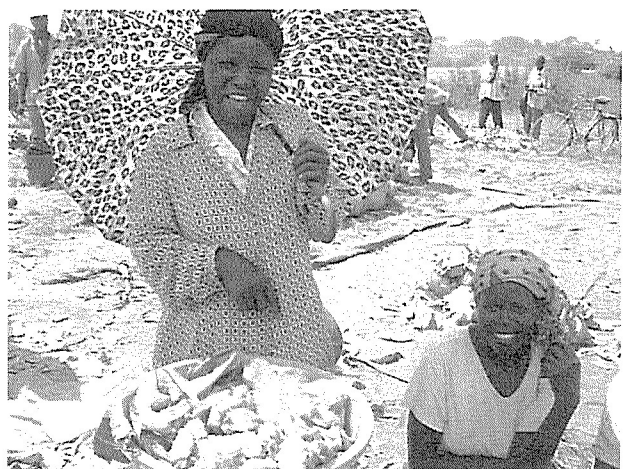


写真3 市場で売り子が話しかけてきました。

獣医学科3年 伊藤 聡

まず最初に、今回の旅の目的について少し説明いたします。JASSO 支援による酪農学園大学熱帯獣医公衆衛生学研修コースはウガンダにおける公衆衛生学（マケレレ大学、国際農業研究協議グループ、JICA、国際家畜研究所のプロジェクトや施設の見学を通して）の現地研修を目的としました。また、その他に大学で勉強した感染症の恐怖を肌で感じること、日本で教えるアフリカが本当にそのままのアフリカなのかを確認することを個人の目的として参加しました。

2月20日（8日目）

この日はムバレ市から首都のカンパラ市へ移動するのですが、その前に朝一番からと畜場の見学に行きました。

と畜場に行った感想としては、素人ながらにバイオセキリティが甘いと思われました。というよりも、ほとんどセキリティがないように感じられました。消毒などもなく、外から中が丸見えという状態でした。と殺する人はつなぎと長靴を履いていましたが、スーツに革靴といったたぐいの人も平然と中を歩いていて、これでは衛生も何もあったものではないと信じられない思いでした。また、解体後の肉も自転車の後ろの木の箱に入れて布を一枚かぶせただけの状態です。不衛生きわまりないと思われました。しかし、この肉を現地の人たちは平然と食べています。このことに関しては、衛生という面でもまだまだ改善の余地があるように見受けられました。

カンパラ市への道中ではツェツェバエのトラップを発見しました。そこで、中身を確認してみました。ツェツェバエは入っていませんでした。最近ではツェツェバエ対策である牛への殺虫剤塗布が普及しているせいか、現地の人もあまり見かけないと話していました。

カンパラ市に到着後、マケレレ大学の Charles Waiswa 教授の事務所を訪問し、ツェツェバエコントロールのお話を聞きました。ツェツェバエが殺虫剤塗布により減少していることは前述したとおりですが、教授の見解では殺虫剤への耐性予測は議論されておらず、またしばらくすると増えるのではないかとのことでした。

夜はアフリカダンスを見学しました。クレメントホテルではポークジョイントの催しがありました。蒔田先生の友人である方が豚を丸々1頭持ってきて、皆にふるまってくださいました。催しに来ていた人の中には国連関係者、医師、弁護士などもいて、その中の食事は緊張しましたが、皆楽しそうにしていました。

このような集まりは仕事以外での友好を深める機会と

してとても大事なのだということを実感しました。

2月21日（9日目）～22日（10日目 帰国）

この日はウガンダ滞在の最終日です。午後の便で帰国するため、ホテルを出て買い物を済ませ、お昼頃には空港に到着しました。蒔田先生は1時間早い便でケニアに向かい、ほかは定刻どおりの便でドバイを経由し、丸1日かけて日本に無事帰国しました。その後、成田空港で一応の解散となりました。

最終日の大半は機中であつたため、あまり書くことがないので、今回のウガンダ熱帯獣医公衆衛生学研修について個人的な総括をさせていただきます。

現地に入ってまず感じたのは人々のパワーです。発展途上のウガンダには不便なこと、貧困、不衛生など解決すべきさまざまな問題は山積しているけれど、国全体が生命力にあふれ、躍動するような活力が感じられました。

都市部を出て農村部に行けば、そこはリアルなフィールドがあり、獣医学の技術というよりも人と人とのつながりが本当に重要なのだと理解できました。彼らの財産である家畜とともに暮らす彼ら自身と、彼らの笑顔が印象的でした。靴もなく裸足であり、電気も水道もないところだつてあります。それでも彼らはこちらと会話するときは笑顔で優しく接してくれました。この体験を通して、自分は今まで間違っていたのだと気付きました。ウガンダに行くまでは、日本よりも貧しいところを見てわれわれがいかに恵まれているかを体験して、日本での生活を改めようと思っていました。しかし、これは大きな間違いでした。むしろ彼らのほうが幸福度は高いように見受けられました。貧しさはあるけれども、本当に素敵



写真4 ツェツェバエのトラップを確認している様子
残念ながら、今回はツェツェバエを捕網できませんでした。



写真5 アフリカダンスのひとつ
ウガンダの各部族の方が民族ダンスを披露しました。

な笑顔で、こちらを見ると手を振って近寄ってきてくれます。彼らが農業、家畜の話をするときは本当に幸せそうな顔をしています。もちろん、彼らの生活に問題がないわけではありませんが、その元気に満ち溢れた姿は自分たちが元気を与えに行ったというよりも、むしろ元気をたくさんもらったという形になりました。

“百聞は一見に如かず”という言葉は本当によくできた言葉で、まさにそのとおりだと思います。

獣医師募集

石狩 NOSAI は下記のとおり大動物臨床経験がある獣医師を募集しています。

記

施設名 石狩地区農業共済組合
北部家畜診療センター
所在地 江別市篠津401-4
求人数 1名
業務 大動物臨床（主に牛）と人工授精
連絡先 詳細は電話で説明しますので、以下にご連絡をお願いします。
担当 家畜部 伊藤 篤
TEL : 011-382-2570

獣医師募集

北海道根室家畜保健衛生所は下記のとおり臨時獣医師を募集しています。

施設名 北海道根室家畜保健衛生所
所在地 〒086-0214
野付郡別海町別海緑町69番地
修業地 中標津町旭ヶ丘9番地4 BSE検査室
求人数 1名
業務 家畜衛生（BSE検査等）BSE検査室における採材と検査
待遇 臨時
勤務 平成25年10月～平成26年3月
（延長の可能性あり）
時間 8:45～17:30
休日 週休2日制（土曜日勤務あり）
給与 基本給 257,000円（20日制）
手当 通勤手当 上限29,300円
賞与 なし
保険等 雇用、労災、健康、厚生年金
退職金 なし
連絡先 担当：上村 伸子（指導課長）
TEL : 0153-75-2439
FAX : 0153-75-2737
E-mail : uemura.nobuko@pref.hokkaido.lg.jp

獣医師募集

北海道十勝家畜保健衛生所は下記のとおり臨時獣医師を募集しています。

施設名 北海道十勝家畜保健衛生所
所在地 〒089-1182 帯広市川西町基線59番地6
求人数 1名
業務 家畜衛生（BSE検査等）
待遇 臨時
勤務 平成25年8月～平成25年12月
時間 8:45～17:30
休日 土日祝日 年末年始（12/29～1/3）
給与 基本給 12,850/日
手当 通勤手当（距離による支給）
賞与 なし
保険等 雇用、労災、健康、厚生年金
退職金 なし
連絡先 担当：寺田 修
TEL : 0155-59-2021
FAX : 0155-59-2571
E-mail : terada.osamu@pref.hokkaido.lg.jp